

平成 20 年 9 月 15 日

## Zardari 優位

Zardari in the driver's seat, for now Sharif outsmarted but not out

Pervez Musharraf 追出し後、Asif Zardari は Nawaz Sharif の裏をかき大統領職要求  
与党連合分裂、政局不安昂進

揺れ動くのがパキスタン政局の常態にしても、ムシャラフ追出しと言う大勝利から 1 週間も経たずしての与党連合解消にはため息が出る。8 月 18 日与党連合は、彼等の宿敵ムシャラフ前大統領を引退に追込んで狂喜したが、8 月 25 日にはシャリフ元首相はザルダリをペテン師呼ばわりして PML(N)の下野を宣言した。

民主主義への移行を邪魔する、として反対派から糾弾されたムシャラフ前大統領の退陣でパキスタン政局の安定を期待した人々にとって、このことは決して嬉しい情報ではなかった。軍事活動強化を凌駕するパキスタン北西地域における過激派活動活発化、制御不能のインフレ、政局不安定がそれらの危機を増幅している。

分析者はザルダリの PPP とシャリフの PML(N)の連帯継続に関して長年疑問視していた。ムシャラフに対する敵意が両者を結び付けていたのだが、その対象が失せた。両派は政治中枢の座を争うのみならず、イデオロギーの面でも対極にある。

イデオロギー面での妥協は兎も角、創立者 Zulfikar Ali Bhutto が信奉した社会主義スローガンに今尚依拠する PPP は自由主義的左派政党である。これに対し、PML(N)はその源流を回教主義軍独裁者・故 Zia-ul-Haq 将軍に有し、保守派が支持する右派政党である。

多くの政治評論家が、両党連帯の脆さに驚いていた。シャリフは表面では、両指導者間の書面約束をザルダリが破ったことを引用しつつ、筋の通った結論を出した。閣僚引揚げ発表の混雑した記者会見で、シャリフは大きなスクリーンに両者が署名した合意書を映し出した。

署名書映像を見ると日付は 8 月 7 日となっており、昨年 11 月 3 日に解任された判事を、ムシャラフ辞任後又は弾劾後の 24 時間内に復職させるとザルダリは明白に約している。更に、国会が憲法の第 17 次改定 —ムシャラフの 1999 年クーデタの免責、国会解散権と軍司令官指名権— を廃止しない場合、両指導者が合意した政治色の無い国家的人物を大統領に指名することになっている。

大きな不快感と非痛感を滲ませてシャリフは次のように指摘していた；ザルダリは先ず判事復職を遅延し次いで一方的に自分を大統領に指名させようと、両者間合意書に反することを行なってきた。

実際、ザルダリの大統領立候補は、駱駝の背と言う諺（相乗り信義の意）を裏切った。自分の党がザルダリをパキスタン大統領候補として推薦し、故 Benazir Bhutto の旦那がそれの受諾を 8 月 23 日に発表する前に「58(2b)は 58.2 billion dollars を意味しないんだと誰かザルダリに教えてやれよ」と言う冗談が評判になった。この冗談は、ムシャラフ将軍が発布した National Reconciliation Ordinance(NRO)の下で赦免された、ザルダリの最終検証されてない経済犯罪に引っ掛けてるのみならず、大統領の国会解散権を規定した憲法 58(2b)條をも比喩している。

「ザルダリ大統領」と言う予想—ムシャラフ退陣後 3 日を経ずして PPP との連帯諸政党内でその予想が勢づいた—は世間に衝撃を与え、民主主義への同盟者シャリフを含む反対者を短期間でザルダリが裏切ったと言う事実もあって、その衝撃は消えていない。ザルダリはムシャラフ 一国会で成立した政府にその影響が常に及んだストロング・マン—を追出したのみならず、シャリフを孤立化すべく全ての権力と取引をしてきた。シャリフはザルダリとは合わないと悟って与党連合から撤退と言う切札を切ったが、ザルダリはその時まで、小会派から十分な支持を獲得していたし—加えて今や米国の支持も—、与党連合分裂に際し PPP は殆ど動揺もしなかった。

シャリフは計算づくのギャンブルをしてきた。筋を通すことに拘ったことで、彼の人気は上昇し、次の選挙で借りを返すほどの実を齎すと考えている。又、政府が直面している諸問題—深刻な経済問題、及び軍事活動に対する内戦的な反軍活動に関する国民感情を阻害するであろう対応—は権力の座にある者に恐ろしい結果を齎すとも考えている。斯様な見通しで、シャリフは好機を窺おうとしている。

ザルダリにとって選択の余地は無かったし、ムシャラフが視界から消えた今、シャリフに対抗すると大方が読んでいる。勿論、シャリフが政権内に留まり今後の数ヶ月に発生する諸問題を分担してくれることをザルダリは望んだであろうが、与党内若手有力者がザルダリにアジェンダを出すという情報に悩んだ。分析家 Cyril Almeida は新聞 The Dawn で「ナワズ・シャリフの対応は反対の為の反対的なもの—最初にムシャラフ、次いで判事、—わが道を行くナワズは、諸要求の提出停止の理由を見出せなかったのだろう」と書いている。

ザルダリも亦、ムシャラフの穏便な引退を手助けした米国の圧力、対テロ戦の支援継続要求の圧力下にあったが、対テロ戦について、シャリフは精々愛憎半ばの気持ちであった。連邦管轄部族地域として知られる北西部族地域での新規軍事行動—数十万人の流民と数百の負傷者を生じている—軍事行動、及び PPP 党内の事実上の内務相 Rehman Malik からの強硬派的諸書面、に対してザルダリ自身が米国からの財政支援はほんの最小限に留まって

いると述べていた。シャリフは政権内にいる時でも、米国とムシャラフの対テロ戦に関しての見解を決して述べなかった。米国も亦、シャリフが宗教関係者と過去に於いて近かったことに照らし、シャリフの同盟心に信を置かなかった。

ザルダリの大統領職狙いに別な理由もあった。大統領になれば、全ての権限機関を PPP が掌握できるという理由。PPP はすでに首相職、下院議長と副議長、パキスタン4州中3州の安定した州政府を既に掌握している。パンジャブ州の PML(N)との連立政府は今や揺らいでいるが、知事(Governor)は PPP であり知事は 58(2b)と同等の地域権限を保有している。来年3月までに PPP は上院もコントロール出来ると考えている。大統領になれば、ムシャラフが持っていた権限と同じ権限を揮えるだろうし、不測の事態を防止して、現下院勢力を長持ちできるだろう。

個人的にも、ザルダリは大統領になれば大統領免責権も得られようし、大統領に留まる限り、11月2日の判事が復職し NRO(国家和解法)を無効化しても、大統領免責条項上ザルダリが起訴されることはありえない。解任された最高裁前長官 Iftikhar Chaudhary が復職しても、ザルダリが PPP 指導者である間は彼を直ちに拘束することはないが、ザルダリにとって判事復職遅延は安全策である。

MuttahideQaumi Movement, The Awami Nationla Party, Jamiat-e-Ulem-e-Islam-Fazlur Rahman, 等の小会派の支援増を背景に9月6日の大統領指名投票でザルダリが勝つにせよ、辛勝であろう。

PPP 共同統率者として、Benazir 暗殺後の政治手腕発揮、の栄光を浴びているが、ザルダリ個人の評判は今ひとつ晴れやかさに欠けるし、世評でも彼は「悪魔の化身」と評されている。彼の言は信ずべきではないと言う定評と裁判問題は彼の身に付きまとうだろう。

PPP 政府は Sindh 高等裁判所の8人の判事を既に再登用しているが、それが法律家達の反発を呼ぶ動きになり、PML(N)はそれを一本釣り政策とみている。

法律家達は国家機能を崩壊すると脅している、正に国会外でシャリフの付属がザルダリの政敵に浮上してきた。パンジャブ州では、いまだに権力の座にある PML(N)政府と面倒な事になりそうだが、PML(N)政府の排除運動は新たな発火点になろう。悪いことに、経済状態と過激派増大で国民の不満鬱積し、PPP 政府の先行きは苦しい。ザルダリに No.1 の地位を享受する時間は殆ど無いだろう。

India Today Sept.8,2008 号

By Hasan Zaidi in Karachi

邦訳：インド・アジア開発

註：Governor (知事又は総督)

印パでは州政府に中央政府は知事を派遣し、州政府が機能喪失時、知事が権限を握る。